

古今和歌集の鹿の歌3首の解釈

— 215・312・1034の歌 —

竹 岡 正 夫

古今和歌集の中の鳴く鹿を詠んだ歌より、215・312・1034（国歌大観番号）の3首を選んで、その解釈についてここに考察する。

1 「奥山にもみぢ踏み分け」の解釈

秋歌・上に「是貞の親王の家の歌合のうた」と題して、詠み人知らずの、

215 おく山に紅葉ふみわけなく鹿のこゑきく時ぞ秋は悲き（藤原定家筆

『伊達家本古今和歌集』の本文表記のまま）

という歌がある。百人一首にも入って有名であるがそこでは「猿丸太夫」の歌になっており、『猿丸太夫集』では、

◇鹿のなくを聞きて

と題詞が付けられている。ところで、この歌の解釈に古来諸説があり、それについて考えていこう。

[1] 「もみぢ踏み分け」の主語について

「奥山にもみぢ踏み分けて」いるものは、作者か、鹿か、で古来解釈が分かれる。即ち、作者が奥山にもみぢを踏み分けて歩いていて、鹿の鳴く声を聞いているとする解と、鹿が奥山にもみぢを踏み分けて鳴いているのを、作者が山麓あたりで聞いているとする解とである。

それについての解釈を明確にうち出した東常縁・宗祇『古今和歌集両度聞書』（寛永15年1638刊）が古注中最も古い解釈で、次のように、鹿を主語とする解を出している。

○外山のもみぢなど散過^(ちりすぎ)ては、鹿も山ふかくこもる物也。深山の紅葉さへちりはつるをふみ分^(わけ)て、鹿のものがなく打^(うち)なく頃、秋はことになしき心なり。

同様に『古今栄雅抄』（延宝2年1674刊）も鹿を主語とする解で、

○秋ふかくなりて。深山の紅葉のちりしきたるをふみ分て。しかの打わびなく

(この)比の秋は。いたりてかなしきとなり。(この)此秋はかなしきは。鹿の声きく時分の秋也。猿丸太夫が歌なり。秋ふかくなりて。は山などあらはなる比。深山の陰をたのみて鹿はある物也。されば「おく山に」と読る也。

と説く。

契沖の『古今余材抄』（元祿5年1697成）になって、次のように作者を主語とする解をもち出している。

○おく山は鹿の住所なり。万葉第十にも「奥山にすむてふ鹿の」とよめり。

「紅葉ふみわけ」は、『文粹』第八、源順「沙門敬公集序」云、

山鶯囀花之朝、 林鹿躑葉之夕 云々。

(ある)或注に、外山の紅葉など散過ては鹿も山深くこもる物なり。深山の紅葉さへ(もり)散はつるをふみ分て物がなく打鳴比、秋はことに悲しき物なりとあるは心得がたし。花は暖気にもよほさるれば、外山より咲て、奥山は遅く、紅葉は寒気にもよほさるれば、奥山は早く、外山は遅き物なり。……只外山・奥山の沙汰なくて此おもてにて見るべし。「声聞時ぞ秋は悲しき」とは、遊山の人の聞てかなしぶなり。此歌、『菅万』（菅家万葉集の略称。菅原道真撰の『新撰万葉集』のこと）(いり)にて、此左の菅家御詩云、

秋山寂寂葉零零。 麋鹿鳴音数処聆。

勝地尋来遊宴处。 無朋無酒意猶冷。

此詩にて心得べし。此第三句によらば、紅葉ふみ分は、人のふみ分るにても(ある)有べし。

この和歌と対置して並べられている『新撰万葉集』中の詩では、「勝地尋来遊宴处」とあり、これに拠るならば、人がもみじを踏み分けているとも解せられると説明するのである。

ただし『新撰万葉集』中に対置されている和歌と詩との内容が必ずしも全面的に一致するものでないことは、例えば、

◇花すすきそよともすれば秋風の吹くかとぞ聞く衣なき身は

蘆花白白得風鳴。 更訝金商入律声。

従此擣衣砧響聒。 千家裁縫婦功成。

の一例（とくに傍線部）からも知られよう。

賀茂真淵の『古今和歌集打聴』^{うちきき}（寛政元年1789刊）は、一首を五七調に読んで、

○奥山^(われ)に入て、我^(おれ)落葉^(ふみわけ)を踏分て、鹿^(きき)の声を聞たるぞ……

と解す。本居宣長の『古今集遠鏡』^{とかがみ}（寛政9年1797刊）は、

○ふみわけは、鹿のふみ分る也。

と明言して次のように口語訳する（傍線部は宣長が補った訳）。

○秋ハ惣体カナンシイ時節ヂヤガ 其秋ノ内デハ又ドウイフ時ガイ_ツチ悲シイ
ゾトイヘバ 紅葉モモウ散テシマウタ奥山デ ソノチ_ツタ紅葉ヲ 鹿ガフ
 ミワケテアルイテ鳴ク声ヲキク時分ガサ 秋ノウチデハイ_ツチ悲シイ時節
 チヤ

香川景樹は『百首異見』（文化2年1805著）の中で、

○人のふみ分くるならんには、奥山^〇のとなくてはかなはず。に^〇とありては、鹿の上にかかれる事、さらにまがはぬ事也。

と主張する。ただし「の」「に」の論は根拠にはならぬ。

以後、諸注いずれも鹿を主語として解しているのであるが、『日本古典文学全集』の注（小沢正夫氏。小学館）では、根拠はあげないが、先掲の『打聴』説を復活して、

○五七調の歌として二句目と四句目で切って解釈する。

として、「踏み分け」の主語は、「歌の作者または一般の人である。」と注している。

この歌は、「もみぢ踏み分け」という表現のしかたが、富樫広蔭『古今和歌集紀氏直伝解』^(ちきでんかい)も「ちかくなくを見とめたるなる事」とするように、いかにも眼前の事のような表現になっているために、作者の動作と解されるのである。

しかし、これは古今集の詠風の特色の一つであって、作者が鹿の身になっての、いわゆる《自》の表現で、おそらく、さような屏風絵でも見て詠んだか、あるいは『新撰万葉集』の道真の解釈のように秋山に独宴・遊山する作者が、眼前のもみじを見つつ、奥山に想を馳せて、さような鹿の姿を幻想して詠んだ歌でもあろうか。さような空想の例は、この歌のすぐ後に、

◇秋萩をしがらみ伏せて鳴く鹿の目には見えず音のさやけさ（秋上・217、

詠み人知らず)

がある。これも「秋萩をしがらみ伏せて鳴く」と、眼前の景のように描写しているが、下に「目には見えず」とあるから、明らかに作者の想像の光景なのである。

この種の幻想表現は詩歌などによく見かけるところで、例えば、丸山薫の「雪が積もる」の最終連、

◇木々が だまって
それを聞いている。
どこか遠い谷ぞいの
雪にうもれた根株や葉の蔭で、
山々の りすや うさぎたちが、
耳をたてて、
じっと それを聞いている。

も同様で、作者の認識のしかたを表わす文型は2文ともに「～ガ～(シ)テイル」の型で、その事象が現在自分の眼前でなされつつあるという認識のしかたを表わしている。一方そのように認識されている事象は「どこか遠い谷ぞい」「山々」といった表現から知られるとおりに、作者の眼前には実在していない事象である。実際には眼前に実在していない事象を、今現在自分の眼前に行なわれていると認識する、即ちそれが「幻想」の表現である。「奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿」も同じく作者の想像の表現と解されるのである。妻を求めて鳴く鹿の声を聞いて、作者が奥山の鹿に想を馳せ、妻を求めて秋の夜な夜な悲嘆に昏れているこの自分を、あの鹿の身に寄せて表現しているのである。

『日本古典文学大系』(岩波書店。佐伯梅友博士注)では、初句の「奥山に」を『きく』にかかるとするが、あまりにも隔たりすぎる憾があり、いかがであらうか。それよりも、この歌はイメージの作り方がきわめて巧みであって、初句で「奥山に」と置くと、そのイメージが下の「もみぢ踏み分け鳴く」にも続いているが、さらにその下の「声聞く」にも重ねられていくのである。それは、「もみぢ踏み分け(連用形)鳴く(連体形)鹿の(連体格)声(連用格)聞く」と、曲折なしに一直線に続いてきた流れが、そこで「ぞ」により強

くおしとどめられる感を持たせているために、「奥山に」のイメージが、そこまで続いて行き、重ね合わされるのである。同様に、「もみぢ踏み分け」の持つイメージが上述したように非常に具体的で現場感を伴っているために、作者ももみぢを踏み分けて歩いているような感じも喚起する。先の「秋萩をしがらみ伏せ」（歩くにつれて秋萩を足や体にかからませ伏せ）というような事であればどんなに具体的イメージを喚起しても、もともと人間のするような行動でないことは初めから明らかであるため、これを作者の行動とは受けとらないという相違があるだけである。

[2]「もみぢ」の色について

この歌の「もみぢ」は、冒頭に掲げた本文のように、藤原定家筆の『伊達家本古今和歌集』では「紅葉」と表記されている。

しかし、『新撰万葉集』ではこの歌を万葉仮名で、「黄葉踏分」と表記しているのである。

◇オノヤマニキキミヅフミワケナツクノコノキトキゾフキヘカサジカ奥山丹黄葉踏別鳴麕之音聆時曾 秋 金敷

又古今和歌集では、この歌の前後は次のようにいずれも鳴く鹿、萩に鳴く鹿の詠まれた歌が続いているのである。

◇山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目を覚ましつつ (214) (215はこの歌)

◇秋萩にうらびれをればあしひきの山下とよみ鹿の鳴くらむ (216)

◇秋萩をしがらみ伏せて鳴く鹿の目には見えず音のさやけさ (217)

◇秋萩の花咲きにけり高砂の尾の上の鹿は今や鳴くらむ (218)

以上から考えて、この歌の「もみぢ」も萩のもみぢ、即ち黄色のもみぢと解すべきである。萩のもみぢは決してカエデなどのように「紅葉」にはならない。

それを定家はカエデなどの「紅葉」と解釈して、そのように表記しているのである。「紅葉」となると、小西甚一博士が評されるように、「深山紅葉の色彩といひ、鹿の妻を恋ふ情といひ、単なる寂寥でなく、どこかに艶を含むさびしさ」（新註国文学叢書、講談社）の味わいを持つ、いかにも新古今風の艶なる色あいの歌となってしまう。百人一首にこの歌を入れたのも、定家は、「黄葉」ではなく、「紅葉」と解していたからであろうと思われる。

まことに、「黄葉」と「紅葉」との表記の相違だけで、いうならば、古今集と新古今集との相違も端的に具体的に知られ、興味深い。

「黄葉」「紅葉」について、小島憲之博士が次のように、中国の詩からの影響のあることを明らかにしておられるのは傾聴すべきである。

○(万葉では)「赤葉」(「赤」を含めて三例)、「紅葉」(一例。2201)のほかは、仮名書を除いて「黄葉」が殆んど大部分を占める。この「黄葉」の文字の使用については、万葉人が木の葉の色づくことに「紅葉」などよりも「黄葉」の文字をよりふさはしく感じたとも考へられ(沢瀧久孝博士『万葉佳品抄』・『万葉集講話 菜摘の巻』など参照)、それも一理由とはなる。しかし、これも……漢詩類を見れば自ら明らかになるものと思はれる。一体、「もみぢ」に当る「赤葉」「紅葉」の例は、六朝より初唐までの詩にも例はあまり多くない。……大部分はやはり「黄葉」である。この一般に通行する中国の例がそのまま万葉集にも採用されたのではなからうか。……「紅葉」の例は、盛唐頃より次第に多く用ゐられるやうになるが……その例の多い「白氏文集」伝来以後のわが平安朝の漢詩文集に、「黄葉」にかはつて、「紅葉」が次第に増加するのは、この考へを助ける傍証となるであらう——白氏文集にも「黄葉」の例はあるが、その多くは「紅葉」である。この白詩の影響を受けた平安朝中期以降の詩文を集めた「本朝文粹」その他の詩集類も、「黄葉」に代つて「紅葉」が勢力を占める——。(上代日本文学と中国文学・中、806ページ)

そのとおりであろうが、本年5月22日朝日新聞のコラム「日記から」の中で、名古屋大学の竹内良知氏が次のようなことを書いておられたが、これも興味深く、参考になる。

○いつかフランスの本を読んでいて、ジョン(黄色)の靴(くつ)というのに出くわしたことがある。どんな靴のことかと思ってあるフランス人にたずねたら、彼は自分のはいている靴をさして、これだと答えた。それは赤革の靴であった。日本人が赤と呼ぶものをフランス人は黄という。それはどうしてか。それには風土もかかって、簡単にはいえないかもしれないが、やはり、色の感覚でさえ、言語、したがって文化に媒介されているといえるであろう。人

間の五感はまさしく社会史をつうじて形成されてきたのである。(下略)

ところで、「……時ぞ、秋は、かなしき。」は『遠鏡』が「……キク時分ガサ秋ノウチデハイ_ツチ悲シイ時節ヂヤ」と訳しているように、秋はどのような時が心が傷むかという、それは、……の時が最も心が傷む、という認識のし方の表現で、「秋は、……時ぞ、かなしき。」と順序を変えてみると、よく了解できよう。

2 「鳴く鹿の声のうちにや秋は暮るらむ」の解釈

秋歌・下に「なが月のつごもりの日、大井にてよめる」と題して、紀貫之の
312 ゆふづく夜をぐらの山になくしかのこゑの内にや秋はくるらむ
という歌がある。

[1] 「ゆふづく夜」の解釈について

題詞に「つごもりの日」とある以上、月末に月は出ていないはずで、そこから「ゆふづく夜」を「夕月夜」と解さず、「夕就く夜」「夕附く夜」と解するものがある。

○^{ユフツク}夜^ノの義で、夕方になるをいふ。……「づく」は、月の意でない事は、朝づく夜、夕づく日、秋づけばの語を思ひ合はすればわからう。(金子元臣『古今和歌集評釈』)

○夕に附く夜で、夕方に近い頃。(窪田空穂『古今和歌集評釈』)

しかし万葉および古今集当時にはさような意に用いられた例は見当たらない。

◇春霞たなびく今日の暮^ト三^ツ伏^ク一向夜^ト清^ク照^ルらむ高松の野に(万葉・1874。古今和歌六帖にも)

◇春されば木^ノの木^ノの暗^クの夕月夜^トおぼつかなしも山陰にして(同・1875)

◇由^ユ布^フ豆^マ久^ク欲^ク影^ノ立^チ寄り合ひ天の川漕ぐ舟人を見るがともしさ(同・3658)

◇ゆふづくよおぼつかなきを玉くしげ二見の浦は明けてこそ見め(古今・417)

◇ゆふづくよさすや岡への松の葉のいつともわかぬ恋もするかな(同・490。

古今和歌六帖にも)

◇春来れば木隠れ多きゆふづくよおぼつかなくも花かげにして(後撰・春中・62)

◇ゆふづくよおぼろに人を見てしより天雲はれぬ心地こそすれ(古今和歌六帖

「夕月夜」。寛平御時后宮歌合)

- ◇ゆふづくよ心もしぬに白露のおくらむ庭に鳴くきりぎりす (同「夕月夜」)
- ◇ゆふづくよさすや岡べに造る屋の形をかしみ鹿ぞ寄り来る (同)
- ◇ゆふづくよ久しからぬを天の川はやくたなばた漕ぎ渡らなむ (貫之集・440「たなばた」。古今和歌六帖にも)
- ◇ 有明の月いとまばゆきほど過ぐしてとて……

ゆふづくよまばゆきほども過ぎぬるを待つ人さへや出でがてにする(定頼集)

したがって、ここも当然、

- ^{フカトキヅク} 暁月夜の対。①日暮れに空にかかっている月。夕月。②夕月の出ている暮れ方。(時代別国語大辞典上代編)

の解に従うべきである。ところで定頼集の歌は上記のように「有明の月」を「ゆふづくよ」と詠んでいる。又後撰・秋歌下・441の「九月のつごもりに」と題する貫之の歌では、

- ◇長月の有明の月はありながらはかなく秋は過ぎぬべらなり

と、明らかに九月のつごもりの有明の月を実景として詠んでいる。「過ぎぬべらなり」とあるから、夜明け方の「有明の月」(それでは明らかに秋は過ぎ去ってしまったことになる)ではなくして、日暮れに出ている有明の月と解される。いずれにせよ、貫之は、単なる枕詞としてではなく、実景として、「九月のつごもりに」「有明の月」即ち「ゆふづくよ」を詠んでいる例があるわけである。したがって、この歌も一般に枕詞とするのに従うべきではなく、実景として詠まれているものと解した方がよいと思われる。この月のイメージは一首全体の背景となって効果を上げているのである。無論、「夕月夜=小暗→小倉(山)」とイメージの転換の効果は十分に発揮されている。

一般にはこの「夕月夜」は、月末で月がないはずだから、実景ではなく、単に下の「小ぐら(暗)」を言うためにのみ置かれた枕詞というふうに解しているのである。即ち、

- ゆふづくよとは暮の月夜也。ゆふさり西の山のはにみえて入ぬる月也。つごもりにはあるべくもなきを、^(この)此歌は、をぐら山といはんとて、ゆふづくよとはつづけたる也。(藤原顕昭『古今集註』)

○三 (竹岡云、第1句「夕月夜」を枕詞と解して口訳しない) ケフハ九月晦日デモウ日モクレカタニナツタガ アレアノ小倉山デ鹿ノナク長イ声ノキレヌウチニ ハヤ秋ハクレテシマウデアラウカ (遠鏡)

○本来は夕方に西の山にかかる、いわゆる上弦の月であるが、ここでは「をぐら (小暗)」の連想で小倉山にかかる枕詞。〔口語訳〕夕月夜を思わせるなんとなく暗い小倉山で鹿が寂しそうに鳴いている。あの鳴き声を別れの曲として、秋は暮れるのだからよ。(日本古典文学全集)

夕月の小暗く出ている小倉の山に鹿の声がしているのである。

〔2〕「声のうちにや秋は暮るらむ」の解釈

「声のうちに」の解釈が問題で、

○なくしかのこゑのうちにあきくるとは、冬になりなば、鹿のなくまじきころ也。(顯昭註)

○けふ聞鹿のこゑにくるゝ秋といふは不用。こゑの内にやとは、鳴こゑに(なく)あくるしのゝめ(あく)(竹岡云、後に掲げる156の歌)の心也。所の興をおもひ入(いれ)て見侍(はべ)べきとぞ。(兩度聞書)

○鹿の声のたえぬるにて。秋のくるゝをしれる也。(榮雅抄)

○『朗詠』には落句「秋を知らん」と載らる。……声の内にや秋はくるらんとは、鹿の音のひびきもいまだ消ぬほどにくるゝ心にて、秋の惜みもあへず、とく暮行心なり。夏歌に「郭公なくひとこゑにあくるしのゝめ」といへるに(くわい)おなじ。顯注に、鳴鹿の声の中に秋のくるゝとは、冬になりなば鹿のなくまじきころなりと(なく)まかれたるは、しかるべくもなし。(余材抄)

○遠鏡に、アノ小倉山デ鹿ノナク長イ声ノキレヌウチニと云るは非也。こは(なく)啼声の聞ゆるうちにといふ意にて、声のきれぬうちにといふには非ず。(香川景樹『古今和歌集正義』)

○あの小倉山に鳴く鹿の声のするうちにサ、秋はもう暮れることであらうか。(金子元臣『古今和歌集評釈』)

○「声のうちに」は、声のしてゐる中。……鹿の声に自身の声を感じて、「声の中にや秋は暮るらむ」と思つたのである。〔釈〕……あの声のしている中に、秋は行くのであらうか。(窪田・評釈)

○あの寂しい声の中で秋は暮れているのだろうか。（日本古典文学大系、佐伯梅友博士注）

○その声の伴奏裡に、（松田武夫博士『新釈古今和歌集・上巻』）

のごとく、すこぶるあいまいな解釈が多い。助動詞「らむ」の解釈も近代になるとほとんどの注が厳密でない。『大系』の解するように、現在、鹿の声のうちには秋は暮れているであろうか、という気持なのであって、決して「もう暮れることであろうか。」「秋は行くのであろうか。」などのような意味ではない。

助動詞「らむ」の意味・用法については、下記の拙論参照のこと。

△『富士谷成章全集・上』878 ページ。

△『富士谷成章の学説についての研究』495 ページ。

△古今和歌集中の助動詞「らむ」の意味と用法（『解釈』168集）

諸注もあげる貫之の次の歌がやはり参考になる。

◇暮れぬとて鳴かずなりぬる鶯の声のうちにや春の経ぬらむ（貫之集・352）

◇夏の夜の臥すかとすればほととぎす鳴く一声に明るるしのめ（古今・夏・156）

上の貫之集の例で説明すると、鶯が春の間鳴いていたが、目に見えない「春」は、その鶯の鳴き声の内部にあって、だんだん鶯が鳴かなくなるのは、その声の内部に存在する「春」が過ぎ去って行く、つまり鶯の声の内部にあって「春」は経過して行くというとらえ方である。それと同様にこの歌も、しきりに山に鳴いている鹿の声の内部に「秋」が暮れて行くと感じているのである。具体的に解説すると、今聞えるのは、さびしそりに鳴く鹿の声ばかりで、その声のしている最中に、目には見えないが次第に「秋」が過ぎ去り暮れて行くのを、ひしひしと感じ取っているのである。私達の体験でいえば、大晦日の百八つの鐘の音を聞きつつ、その一回一回の鐘の音とともにこの一年も一刻一刻過ぎ去って行くのを如実に実感するが、それはまさに、鐘の音の内に年が暮れて行くと表現できよう。今日までの諸注すべてそこまで解き得ていないが、まことに貫之のすぐれた詩的な感じ方である。（ちなみに付言すると、古今集中の貫之の歌はなお正確に解釈されていないものが多く、貫之の真価ははまだ十分明らかにされていないと評さざるを得ない。近刊の拙著『古今和歌集全評釈 古注七種集成』

上・下参照)

初句の「夕月夜」の小暗い視覚と、小暗い山の中から聞えてくる鹿の声の聴覚とが混融して、幽玄な趣の幻想的な景がここに構築されている。鹿の声の内に秋が暮れて行くという感じ方はまことにすばらしい。

なお「なが月」は『古今訓点抄』『ナガヅキ』、『日葡辞書』『Nagazzuqi』と連濁にしている。上代の万葉仮名書きの例も見当たらないので、清濁未詳。

3. 「なぞわが恋のかひよとぞ鳴く」の解釈

巻19雑体の^{ひかい}誹諧歌（おどけて俗語など用いて、そしる意の歌）に「題知らず」の^{よしひと}紀淑人の、

1034 秋の^(野)よにつまなきしかの年をへて なぞ わがこひのかひよとぞなく
という歌がある。

[1] 「なぞ」の解釈

「なぞ。」で切れる語で、富士谷成章の『かざし抄』が、

○なぞ里『ナンヂヤノ』といふ。とふ詞にはあらず。あやしみとがめたる詞なり

と説くのが正しい。『兩度聞書』も、

○「なぞ」はとがめて云詞也。それは何ぞ、只せんなき我恋のかひよとなくにてこそあれと云也。

と説き、『日本古典文学大系』（佐伯梅友博士注）も、

○「なぞ」は、なんだ。なんにもないじゃないかという心持。従来「なぞ」を地の文に出して「なく」にかけて解しているが、それでは係りの助詞「ぞ」が重複する。

と説いている。いずれも従うべきである。したがって、(傍線は竹岡)

○何とて我恋のかひある如く鳴ぞ (打聴)

○何だつて、我が恋のかひよとばかり鳴くことぞ (窪田・評釈)

○どうして我が恋に甲斐があるよというてなくのか。(至文堂刊、藤村作博士注)

○なぜ甲斐よとなくのか。(日本古典全書・朝日新聞社、西下経一博士注)

○どうして私が恋をした効果はないのか。(日本古典文学全集、小沢正夫氏注)

のごとき、いずれも誤解である。さすがに、『古今余材抄』は、

○わがこひのかひはなにぞよといひてなく鳴を、

と説き、『遠鏡』も、

○此歌、下句のてにを(この)はの事、「なぞ」と切て、右の意(ワガ)（我恋ノカヒヨカヒヨトサナクガ アレハドウシタ事ヂヤゾ）に見べし。又『詞の玉の緒』二の巻の終にいへるも、一つの見やう也。

と説明している。『詞の玉の緒』二之巻には次のような説明があり、参考になる。

○古今・十九の「秋の野に妻なき鹿の云々」といへる歌のてにを(ワガ)はの事、結句のはもじをぞとするときは、上のなぞよりよもじまで、鹿の鳴言(ワガ)にて、わが恋のかひは何ぞよといふ意也。然るをなぞといふ辞上に在て、下によもじある故に、さは聞とりにくきやうなれ共、古へはかくもよみけん。右のごとく見るときは、なぞの辞はよもじまでへかゝりて、その下へは及ばざる故に、ぞもじのてにを(ワガ)は不調にあらず。しかれどもなほ「かひよとはなくとあるぞ、事もなくやすらかに聞えたる。はもじなる時は、「わがこひのかひよといふが鹿の詞にて、なぞはそれをとがめたる作者の詞也。

「なぞ、わが恋の甲斐よ。」の部分が鹿の言葉の直接話法的表現になっているのであって、『わが恋の甲斐よ』と、なぞ鳴く」の意ではない。それでは『大系』も説くように助詞「ぞ」が重複するからである。

〔2〕「わがこひのかひよ」の解釈

「かひ」は、

◇味飯を水にかみなしわが待ちし代(かひ)はさねなし直(ただ)にしあらねば（万葉・3810）

◇生贖償債<訓釈：母乃々カ比>（日本霊異記・上・序）

のように「代(かひ)」「替(かひ)」が語源で、それに代わるだけの値うち・効果をいう。口語の「かいがない」などのように軽く解すべきではない。この歌も、年久しく恋いこがれているが、その代償は「なんだ。」と言っているのである。

さて、諸注すべて「カヒヨ」を鹿の鳴き声の擬音と解して、

○これも寄鹿恋の心なり。年へてこひしるしなれば、我こひのかひはなにぞよといひて鳴を、鹿の「かひよ」となくによせたり。（余材抄）

○毎年々々秋ノ野デ 妻ノアリモセヌ鹿ガ 我恋ノカヒヨカヒヨトサナクガ

アレハドウシタ事ヂヤゾ 妻ニアフタラバコソ 恋ノカヒガアルトハ鳴ウ事
ナレ 妻ノナイノニ恋ノカヒヨト鳴ウハズハナイニ (遠鏡)

- 鹿の鳴き声は「かひよ」であるが、作者の解釈を加えて言った。(大系)
- 「かひ」に「甲斐」(効果)と鹿の鳴き声の「かひよ」がかけられる。そのため「よ」という少し無理な助詞が使われた。(全集)
- 「かひよ」は、鹿の鳴き声で、「かひ」に甲斐を詠みこむ。(角川文庫、窪田章一郎氏注)
- 何が我が恋の甲斐か。「なぞ」は、「かひよ」にかかる。「かひよ」は、鹿の鳴き声を「甲斐よ」と聞きなしたもの。〔通釈〕秋の野原で、妻のいない鹿が、何年もの間、我が恋の甲斐は何だろう、何も甲斐がないではないかと鳴いていることであるよ。(松田武夫博士『新釈古今和歌集 下巻』)のように解釈しているが、すべて正しくない。鹿が「カヒヨ」と鳴くなどという認識のしかたは到底考えられないことである。

鹿の鳴き声は次のように擬声されているのである。

◇ぬれ衣をほすさを鹿の 声聞けばいつか^{ひよ} (「干よ」と、鳴き声「ヒヨ」とを掛ける)とぞ鳴きわたりける (古今和歌六帖)

◇ひいと鳴く尻声悲し夜の鹿 (芭蕉)

したがってこの歌も「こひのかひよ」の傍線部のところに鹿の鳴き声が写されていると解すべきであろう。「わが恋の代償よ」を「ヒ、ヒヨ！」と鹿の鳴き声の擬音語に寄せているところに、誹諧性が認められるのである。諸注全く正解できず、例えば『窪田・評釈』が、

○鹿の筋の立たない鳴き方をする上に、怪しみと共に可笑味を感じて俳諧としたものである。

と説き、最新刊の『松田・新釈』が、

○「かひよ」と聞える鳴き声を、そのまま歌うのではなく、「なぞわが恋の」という意味を含んだ「かひよ」とであると歌っているところに誹諧味がある。何年もの間、妻を得られず、思い甲斐のないことは十分承知しているながら、それでも、「かひよ」と鳴き続けていることに、矛盾をおしとおしているところから生ずるおかしみがあるのである。

などと説くのも、ともに「誹諧」の誤解にもとづく曲解とすべきである。

「誹諧」については下記拙論参照。

△古今和歌集・雑体の「誹諧歌」—「誹諧」は「俳諧」にあらず—（『香川大学一般教育研究』6 1974・10・5）

一首は《自》（作者）を下記のように《他》（鹿）に寄せているのである。

秋の野に	妻なき鹿の	年を経て「なぞ、わが恋 ^〇 のか ^〇 ヒヨ」とぞ鳴く	《他》
	妻なき	年を経て「なぞ、わが恋 ^〇 のか ^〇 ひよ」とぞ泣く	《自》

〔口語訳〕秋の野に、（私みたい）妻のない鹿が、何年もの間、「なんだい、わたしの恋^〇のか^〇ヒヨ（代償よ）！」と鳴くのさ。